後宮の偽物3

～冷遇妃は皇宮の秘密を暴く～

山咲 黒 Kuro Yamasaki

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

序．孫灯灯の決意

吐き気がするほど甘い香りであった。

梔子と沈丁花と金木犀が一斉に咲いて自分たちの芳香の優劣を競っているかのような――ちぐはぐな甘さだ。

その香りのせいで、啓轅の飼っている黒貂の小黒などは、苑祺宮の奥殿にして『高婕妤』の寝殿でもある涵景軒に近づいてくることもしない。いずれ慣れるだろうと耐えていた灯灯であったが、我慢の限界は唐突にやってきた。

「あの香を下げてちょうだい」

卓子の上で螺鈿細工の箱を開けようとしていた春児が顔を上げ、困ったような表情を見せる。

「しかし、娘娘。あれは安胎の……」

「こんな香が充満しているところで暮らしていたら、胎児だって吐き気をもよおすわ」

それはいけない、とばかりに飛び上がった春児が、慌てて香炉を外に持ち出すべく動き出す。床榻に浅く腰掛け、凭肘几にもたれかかっていた灯灯は小さく息を吐いた。

――高良嫣の懐妊と苑祺宮への帰還。

その知らせは、山から降りてくる風よりも早く後宮中に広まった。

主人の懐妊の知らせを聞いた春児は、側にいながら主人の体調の変化に気づかなかった自分に恥じ入った後で、空に舞い上がらんばかりの歓喜を見せた。

高良嫣は懐妊によって、『昭儀』より下で、『才人』よりも上の『婕妤』の封号を賜った。もちろんそれは、今この、苑祺宮の正殿に居座る胡『婉儀』には及ばない。しかしいずれ無事皇子を――皇帝のご寵愛を考えれば皇女であったとしても――産み落とせば、またすぐ元の『貴妃』に戻ることができるだろう、と春児は考えているようであった。

楽観的なのは、あの子の長所だ、と灯灯は思う。

そして善良でもある。

だからこそ灯灯は、真実をすべて話して春児を自らの秘密に巻き込もうとは思わなかったのだった。

今、苑祺宮に住まうのが本物の高良嫣ではなく――孫灯灯という名のかつての側付き女官であることや、高良嫣の妊娠がまったくの偽りであることを語っては、春児を、

こちら側に完全に引き込むことになるから。

「娘娘、体調がお悪いのであれば、林太医をお呼びしましょうか？」

すみやかに香炉を排除した春児は、灯灯の前にやってきておずおずと聞いた。

「いえ、大丈夫よ。窓を開けてちょうだい」

そう命じると、春児が灯灯に手炉を渡してから、格子窓を押し開ける。

冬の冷たい外気が、撫でるように灯灯の頬を掠めた。房間内の甘い香りが外気に押し出され、空気中の勢力が逆転する。灯灯はようやくまともに息ができる心地になって、ふうと肩を下ろした。

灯灯にとって母親であり姉であり、たった一人の大切な家族であった本物の高良嫣が亡くなってから、二年が過ぎていた。

あの人の死を隠し、身代わりとなって苑祺宮に残ったのは、あの人の無二の宝物である第二皇子啓轅を守るためであって、後宮でのし上がるためではない。だからこそ灯灯は、自分が懐妊したふりをする日がくるなんて、夢にも思っていなかったのだが……。

（本当に、この後宮という場所は先の読めないところね）

そう思いながら、灯灯は、先ほど春児が開けようとしていた螺鈿細工の箱に視線を移した。

「あの箱が、誰からですって？」
「あ、はい。刑部からですよ。何を贈ってきたのか見てみますね」
箱を開けた春児は、意地が悪そうに眉を上げた。
「あら、まぁ。翡翠の腕輪です。一級品だわ。よっぽど娘娘のご機嫌を取りたいのでしょうね」
太皇太后の命を受けた刑部の人間が、灯灯を冷宮に入れたのはほんの十日ほど前のことだ。誰も想像もしなかった逆転劇で再度皇帝の妃嬪に収まった高良嫣に、逆恨みなどされてはたまらないと刑部の人間が考えたのも理解できるというものだった。
「他にもいくつか届いていますよ。戸部からは人参ですね。他にも礼部郎中の殷氏からは花瓶が。ええと毛織物を贈ってきた康氏は……」
「もういいわ。きちんと記録をしておいて。いただいたものは触らないでしまっておくように」
「心得ております」
春児はにこりと笑った。
自らの主人が注目されていることが嬉しいのだろう。春児はずっと機嫌がいい。
公式に林太医の診察を受け、懐妊が確認されてから四日が経っていた。
その間、多くの者が現在の皇宮内の勢力図と、今後の推移を頭に思い浮かべただ

ろう。
奸臣を廃して親政を始めたばかりの皇帝と、後宮の主権を握りつつある太皇太后。
今の所絶妙な均衡を保っている両者の天秤に、冷宮からたった五日で戻ってきた高良嫣の懐妊が、どのような影響を与えるのか。さまざまな憶測が皇宮の水面下で交わされているはずだ。
灯灯に懐妊祝いを送ってこない人物は、太皇太后の出方を窺っているに違いない。逆に、懐妊祝いを送ってきた人物は、朝政に干渉してくる太皇太后を、皇帝が抑え込めると踏んでいるのだ。
皇宮にはさまざまな人間の利害と信念が渦巻いている。
けれど苑祺宮で『絶対安静』を言い渡されている灯灯は、複雑に絡み合うその糸を目の当たりにしないでよい分、平穏であった。
灯灯は、絹の面紗の上から頬杖をついた。
「……退屈ね」
「仕方がありませんよ。太医に、安静にと言われているのですから」
涵景軒に閉じこもって最初の一日は、とにかく腹を立てていた灯灯である。
胡佳燕に陥れられて庶人に落ち、冷宮に入れられたのは、ほんの十日ほど前のことだ。懐妊したと偽ることで、ようやく冷宮を出て啓轅の元に戻ることができた。次は

こちらが先手を打つ番だと意気込んでいたのに――皇帝と皇兄から下された命令は、「しばらく涵景軒で大人しくしているように」というものだった。

理不尽ではないか。

（殿下は、私を鉄屑になるまで使い倒すと言ったのに）

後宮の一宮の奥殿にいる身では、皇帝と皇兄に不平を訴える機会などそうない。かといって春児にすべて話すわけにもいかず、灯灯にとってこの数日は、一人悶々とするばかりの日々であった。

二日目には自分は役に立たないのだと落ち込み、三日目には苑祺宮から抜け出して隠れて行動してみようかと考えた。そして四日目の昨日、偉い人たちには彼らなりの理由があるのだと自分を納得させようとしたのが功を奏したのか、五日目の今日は思いの外気持ちが落ち着いている。

ここ数日の感情の揺れ動きを嵐にたとえるのなら、今日はまるで凪のようだ。

感情に振り回されるのをやめたから、安胎香の香りの甘さを気にする余裕ができたのかもしれない。そんなことを考えていたので、戸口に現れた人物に気づくのが遅れた。

先に気づいたのはもちろん春児だ。火鉢の上で温めていたお湯を取りに行った彼女は、いつの間にか房間内に立っていた人物を見てぎょっとして固まった。次いではっ

と我に返ると、その場に両膝をついて平伏する。

「こ、皇后娘娘にご挨拶申し上げます」

灯灯は立ち上がった。

春児が見た方向は、灯灯のいる位置からは見えない。しかし彼女が足を動かす前に、その人は透かし彫りの仕切り板の向こうから現れた。

「皇后」

暗く淡い緑色の斗篷を身に纏った皇后朱斉微は、後宮に住む他のどの女よりも孤高で、揺るぎなく見えた。その佇まいは凛としていて、静謐さを漂わせている。

「良嬪がご挨拶いたします」

この国の国母を前にして灯灯が空首の礼をすると、斉微はにこりともせずに言った。

「挨拶は不要よ」

礼を解いた灯灯は、それまで自分が座っていた床榻に斉微が腰掛けられるよう動こうとしたが、それも止められた。

「私は椅子でいいわ。長居しないから。あなたは先に座りなさい、婕妤。絶対安静なのでしょう」

困惑した表情を浮かべる春児に、灯灯が目配せをして椅子を持ってこさせる。そこに斉微が落ち着いてようやく、灯灯も床榻に腰を下ろした。

房間の隅に控えた春児が、落ち着かなさげに戸口のほうを気にしているのは、皇后に付き従っているはずの側付き女官がこの場にいないからだろう。斉微が一人で興龍宮を出てここまで来たとは考えにくいので、外で待たせているのだろうか。その意図を理解して、灯灯は春児に言った。

「春児、茶の用意をしてから、人払いをしてちょうだい」

「かしこまりました」

春児は二度大きく瞬きをすると、手早く新しい茶の用意を終えてから房間を出て行った。無言のまま再度立ち上がった灯灯は、先ほど春児に開けさせた格子窓を自分で閉めながら、人の気配が遠ざかるのを確認する。

そうしてからようやく、灯灯は斉微に向き直って聞いたのだった。

「皇后。何かあったのですか？」

「体調はどう？」

ちらりとも笑顔を見せないでそう聞き返した斉微に、灯灯はわずかに眉を寄せた。

「からかっているんですか？」

灯灯の妊娠が嘘なのは、斉微も知っているのに。

絶対安静の診断だって、下手に多くの見舞客を受け入れて、懐妊に疑惑を持たれるのを避けるためだ。

「からかう？　そうね。あなたのそんな表情が見たくて聞いたから、からかったということになるのかしら」

灯灯が高良嬪の偽物であることをも知る朱斉微は、いつものように無表情である。しかし今の灯灯には、彼女のその顔に、どこか面白がるような色を見て取ることができた。

「怒らないで。正殿の、胡婉儀の様子を見にきたのよ」

斉微は言った。

「まだ陛下のお渡りが一度もないから。そのついでに、あなたに会いにきたの」

「婉儀の……そうなんですね」

苑祺宮の正殿は、かつて高良嬪の殿だった。けれど高良嬪が庶人に落とされ冷宮送りになったことで、その後釜に胡婉儀が収まったのだ。

一つの宮を複数の妃嬪が共有することは珍しくないが、その場合、前院に面した正殿は、位の高い妃嬪が使用するのが原則である。だから灯灯が苑祺宮に戻ってきた時も、『婕妤』よりも位の高い『婉儀』を正殿から追い出すことはできなかったのだ。

「どんなお話を？」

灯灯は、二つ並べた茶杯に菊茶を注いで問うた。

十六年前に洸州の別院に移っていた太皇太后は、奸臣馬膺の失脚の報が広まると、

孫娘の安楽長公主と、側仕えを連れて皇宮に戻ってきた。
その側仕えこそが、灯灯を陥れ、今苑祺宮の正殿に居座っている胡佳燕だ。
彼女は灯灯が冷宮送りになる前日に入宮し、婉儀となった。
「当たり障りのないことよ。けれど、今日確信したわ。婉儀の目的は、陛下の寵愛を得ることではないのね」
斉微は、灯灯から受け取った茶杯を持ち上げ、香りを味わってから唇につけた。灯灯は皇后の言葉の続きが気になったが、急かすのをぐっとこらえて彼女が喉を潤して再び口を開くのを待つ。
「陛下が、お渡りにならないのを気にしていないようだった。寂しいというようなことを言っていたけれど、あれは嘘ね」
「それなら、婉儀が入宮した目的は……」
「皇子たちはまだ幼いわ。あなたには啓轅がいるし、淑妃には啓笙がいる。それに、徳妃は子供に興味がないでしょう」
将桓には三人の皇子がいる。
皇后が産んだ第一皇子の啓熾と、高良嫣が産んだ第二皇子の啓轅、そして淑妃が産んだ第三皇子啓笙だ。
長子の啓熾は、まだ六つであった。

「私が廃后になれば……太子の後見人には、太皇太后がなるかもしれない。そして、太子には母親代わりが必要よ。先ほど、婉儀は、啓熾のことをいくつか聞いてきたわ。好きな食べ物や、好きな歌を」
「まさか、婉儀は皇后を廃して……自分が太子を引き取るつもりで？」
灯灯は青ざめた。
太皇太后の目的が廃后ではないか、というのは灯灯らの間でも可能性として口にされていたことであった。けれどまさか、太子を、皇后から奪おうなどと……。
灯灯は怒りで目が熱くなるのを感じた。凪のようであった感情が大きく波打つ。
子を、母親から奪うなんて。
「白禎殿下が私に、警告をしてくださったわ」
灯灯は顔を上げて斉微を見た。
秦白禎。
皇帝の兄だ。
灯灯がその剣となるのだと決めた人。
「慎重に行動するようにと。でも私には、あなたのほうが心配よ。懐妊で、多くの人間があなたに注目している。もし万が一……」
もし万が一、懐妊が嘘だとばれたら、太皇太后は間違いなく灯灯に死を命じるだろ

う。君主を欺くことは、許されざる大罪だからだ。
「殿下が、胡婉儀の来歴について調べたわ。でも、胡遠雲（えんうん）の養女となる前のことは何もわからなかった。養女になったのが二十年ほど前のことにしても、一切記録がないなんて都合のいいことがあるかしら。……灯灯」
皇后が呼ぶその名は、囁（ささや）くようであった。
「……あなたは、冷宮にいたほうが安全だったかもしれない」
冷宮に入った当初は、灯灯も自分は冷宮にいるほうがよいのだと思っていた。
自分は偽物だから、大切な啓轅の弱点になる。だから本物の、将桓や斉微に守ってもらうほうが、啓轅にとってはよいと思えたのだ。
けれどそれは違う、と今はわかる。
自分が高良嫣の偽物なのは事実だが、この感情は偽物ではない。
自分が産んだ息子ではないけれど、良嫣の――珠蘭姐姐（しゅらんねえさん）の大切なあの子を慈しむ気持ちは、本物なのだ。
だから。
「いいえ、皇后」
灯灯は微笑んだ。
先ほど怒りに燃えた炎はまだ勢いを失っていなかったが、それを隠して笑みを浮かべられる強さが、今の彼女にはあった。

「どうか、そんなことをおっしゃらないでください」
『お前が思いつくのは、ろくなことじゃない』
（あの時、殿下には止められたけれど……）
太皇太后が、斉微から啓熾を奪おうというのなら、こうして待っている理由などない。隠れている理由などないではないか。
戦わなければ。
「私が、お守りしますから」
斉微を、将桓を、そしてもちろん――啓轅を。
きっと、守ってみせる。
（私の、大切な人たちを）

一．月下の宴

後宮の北東に位置する仙峰軒は静かな池の上に建てられていて、丸く切り取られた窓から池に映る月を見ることができた。

水面に映った月は手の中に収められるほど小さく、黛青色の夜の中で震えている。その時、ふいに月が乱れて水面に溶け、波紋が広がった。冷たい雫が寒雨の先遣隊となって落ちてきたのかと思った灯灯だったが、少し前に見た夜空に星を遮る雲がなかったことを思い出す。であればおそらく、池に住む魚のいたずらだろう。

「長公主。改めて、お戻りをお喜び申し上げます。こうしてお会いできることを楽しみにしておりました」

そう言ったのは、李淑妃だ。

痩せた身体に碧玉色の斗篷を羽織った長陽宮の主人は、自らの正面に座る安楽長公主に微笑む。

「都は洸州よりも寒いでしょう。太皇太后と長公主が不自由な思いをされないよう、吏部の人間に、崇敬宮には上級炭をお届けするように命じておきましたのよ。何かご

不便がございましたら、いつでもおっしゃってくださいね」

「ええ、ありがとう」

皇帝の異母妹である安楽長公主は、灯灯の実際の年齢よりも一つ年下の十八歳であった。母親の姚太妃は太皇太后と同じ謝家の人間だ。長公主が、母である姚太妃と一緒に洸州に残らなかった理由を灯灯は知らない。けれど彼女が連日のように崇敬宮に商人を呼んでは散財している様子からすると、長公主が退屈な田舎暮らしに飽き果てていたのは間違いないだろう。

一筆刷いたような切れ長の目元の下には、いかにもわがままそうな小さな黒子が落ちている。彼女は退屈な様子を隠そうともせずに、小さく息を吐いて手首に嵌めた金細工の腕輪を弄んだ。

太皇太后が嵩山寺に参詣するため後宮を出たのは、昨日のことだ。仙峰軒に集まった妃嬪らは、このささやかな宴が催されたのは、一人崇敬宮に残った長公主が寂しい思いをしないようにという皇后の配慮なのだと信じている。

今夜の席次では、長公主の右隣に何徳妃、蘇昭儀、梅才人が並び、その正面に、李淑妃、胡婉儀、そして灯灯――つまり、高婕妤が並ぶ形になっていた。

末席のほうからだと、全体がよく見えるものだ、と灯灯は思った。昭儀と才人は、互いの小声が聞こえるくらいに身を寄せているし、徳妃は、目の前に並んでいる菜肴

に夢中だ。そして胡婉儀は、そのとろりとした目を伏せて杯を口に運んでいたが、周囲の会話には耳を傾けているのがかわった。

「まもなく、大儺の儀が行われるわね」

皇后朱斉微の声は静かであったが、その場にいた妃嬪らの視線を集めるだけの力を持っていた。

「礼部がすべて取り仕切っているから、我々がやることはないわ。けれど滞りなく新年を迎えられるよう、皆準備しておくように」

大儺の儀とは、新年の前に行われる邪気払いの儀式である。

外宮ではさまざまな儀礼が行われるが、後宮はそれらに参加しない。その代わり、十二の神獣に扮した人間が各宮を回って悪鬼を追い払うという儀式があって、一種の祭りのような様相を呈するのであった。

そして悪鬼や神獣に扮するのは、礼部が選んだ民間の劇団だ。

「そんな、無理です昭儀」

「いいじゃない、英玉」

「でも……」

「ほら、早く！」

灯灯の正面で、昭儀と才人が何やら揉めている。

揉めているというよりは、蘇昭儀が梅才人に何かを無理強いしようとしているようだ。同じ永安宮を寝宮とする二人は、もともと主人と女官という関係であったせいか、昭儀のわがままに才人が振り回されているようなところがあった。

「ね、お願いよ。ほら。あの、皇后！　才人が、お伺いしたいことがあるようですわ」

蘇昭儀はそう声を上げて、にこりと笑った。

一方で、昭儀の隣に座る梅才人は、顔からさぁーっと血の気が引いて青ざめている。そんな彼女を怪訝に思っているのか哀れに思っているのかわからない表情のまま、皇后は静かに促した。

「才人、何かしら」

「あ、はい。あの……その、今年悪鬼や神獣を演るのは、黄家班だというのは本当ですか？」

もごもごとしたその声音が皇后に届いたかは懸念が残るところであったが、幸いなことに皇后は聞き返すことなく答えてくれた。

「ええ、そう聞いているわ」

「きゃあ！　本当ですか？」

手を叩いて甲高い声を上げたのは、梅才人をけしかけた張本人の蘇昭儀である。彼

女はすぐにしまったという表情で手を口に当てたが、皇后の氷の視線に耐え切る胆力は持ち合わせていなかったようだ。

「その……黄家班の芝居はとっても人気で、市井でも中々見られないんですよ」

「黄家班？　黄家班って華陰楼で白蛇伝をやった劇団かしら？」

蘇昭儀のその言葉に反応したのは、意外なことに何徳妃であった。ふくよかな外見を持つ何徳妃は、目をキラキラとさせながら続ける。その口元についているのは、鰥魚の甘酢餡だろうか。

「初演の時、茶菓子で出てきた花酥がとっても綺麗で可愛らしくて美味しかったと聞いたわ。大儺の儀でも食べられるかしら」

その時、ぷっと噴き出すような音が聞こえた。

それまで退屈そうな顔をしていた長公主が、口元を隠してくすくすと笑っている。徳妃はきょとんと目を丸くしたが、はっと気づいた賛徳宮の女官が慌てて徳妃の口元を拭った。

「あら、何かついていた？」

徳妃が瞬きをしてから、舌を出して唇を舐める。

「あは！　いやだ、ごめんなさい。なんだか、おかしくって」

それはあからさまな嘲笑だったので、先ほど長公主に媚を売ろうとしていた淑妃で

さえ眉を寄せた。

「徳妃は本当に、食べることがお好きなのね」

笑いを抑えられない口元を隠しながら、長公主が言う。その声音に宿っている皮肉に気づいているのかいないのか、徳妃は柔らかく笑った。

「ええ。好きですわ。長公主、そちらの冬筍もとっても美味しいですよ。どうぞ召し上がってみてください」

しかし長公主は、徳妃に答えないで胡婉儀を見た。

「ねぇ佳燕。お兄様の後宮は、とってもにぎやかなのね」

突然水を向けられた胡佳燕は、おや、という表情を見せた後、持っていた杯を置いておっとりと答えた。

「ええ、そうですね。長公主」

とろりとした目元を下げて、口元を緩めて笑う。

「本当に……可愛らしい姐姐ばかりです」

そう答えた胡婉儀はさまざまな表情を浮かべた妃嬪らを見渡して、最後に灯灯のところで視線を止めた。

物言わぬ眼差しが交錯する。

「いい加減になさい」

その時響いたぴしゃりとした声は、皇后のものであった。
「長公主……私を愚弄しているの？」
皇后のその眼差しに睨まれたら、灯灯でさえひやりと背筋を凍らせるというのに、長公主はどこか鈍いのかもしれない。「あら、まぁ。そんな嫂子（おねえさま）」と大袈裟（おおげさ）な身振りで答えると、すっと立ち上がって桂花酒を注いだ杯を両手に持った。
「もちろん、そんなつもりはございませんわ。けれどそう思わせてしまったのなら、罪滅ぼしに一杯」
くい、と長公主が杯を飲み干す。すると控えていた女官がすぐに新しい桂花酒を注いだ。
「そして、高婕妤が懐妊されたと聞きましたので、お祝いに一杯」
杯がまた空になる。
「最後に」
長公主はにこりと笑った。
「罪人の娘でありながら、国母としてあり続けられる嫂子（おねえさま）の幸運に、一杯」
罪人の娘――。
長公主のその言葉の意味を理解できない人間はその場にいなかった。空気が凍りつくが、長公主が意に介している様子はない。

李淑妃は顔をこわばらせて、何徳妃がわずかに眉を寄せる。蘇昭儀はあんぐりと口を開けて、梅才人は青ざめた。
朱斉微は……馬膺の養女なのだ。
皇帝の外戚として、そして丞相（じょうしょう）として、巨大な権力を振るっていた奸臣（かんしん）。しかしその男は、ほんのふた月ほど前に、その罪を暴かれて投獄された。
投獄したのは、皇帝とその兄だ。
そして裏では、朱皇后がそれに協力した。だからこそ恩赦が与えられ、連座を免（まぬが）れた。そのことを知らぬ者など、この国にはいないというのに。
張り詰め切った空気の中、長公主がその唇を杯に近づける。
「あら」
その時灯灯は、ことさら大きく声を上げた。
「長公主、お気をつけてください。そちらに虫が」
すると長公主は眉を寄せて灯灯を睨む。
「高婕妤、何度もそんな手が通用すると思ったら……」
彼女がそう言いかけた時、まるでちょうど機会を窺（うかが）っていたかのように、茶色い羽を持つ虫がひらひらと長公主の目の前を通り過ぎていった。
冬蛾（とうが）だ。

その冬蛾は灯灯らが仙峰軒にやってくる前から軒先に吊された灯篭にぴたりと張り付いていたのだが、何かに誘われたように下に降りてきたようであった。

「っいやー！」

長公主の悲鳴が、冬の張り詰めた夜気に響く。

「だ、だ、だ、誰か早くなんとかして！」

飛び上がって持っていた杯をひっくり返した長公主が、側にいた女官の背に隠れる。悲鳴は女官の中からも上がり、仙峰軒は騒然とした。

「きゃあ！」

「いやっ！」

「ひい！」

皇后の命令を受けた一部の果敢な女官らが冬蛾を捕まえようと飛び上がるが、一向に捕らえられる気配がない。それどころか、蝋燭によって浮かび上がった冬蛾の影にさえ翻弄される女官が出てくる始末であった。

「そっちに行ったわ！」

「早く捕まえて！」

（あらあら）

灯灯は面紗の下でぺろりと上唇を舐めて、仙峰軒の心慌意乱な様子を傍観した。

まさか冬蛾一匹で、女たちがここまで大騒ぎしてしまうとは。

灯灯が市井で暮らしていた頃は、灯りに群がる冬蛾を集めて羽を縫い繋げれば寒さを凌げるのではと考えたものだが、皇宮の女たちにはとんでもないことに違いない。

「春児」

灯灯は、側にあった盆で冬蛾に応戦しようとしていた春児を呼んで命じた。

「灯りをすべて消しなさい」

「え？　すべてですか？」

春児が聞き返す。

「そうよ」

仙峰軒の中は夜を感じさせないくらい明るく照らされていたが、この混乱の中、それをすべて消せとはどういうことかと思った春児である。しかし信頼する主人の命令であるので、動きを止めたのは一拍の間だけですぐに「はい、かしこまりました」と頷いた。

「皆様、灯りを消してください！」

春児は、そう言って手近にあった燭台の蝋燭を吹き消した。

「高婕妤の言う通りになさい」

皇后の命令で、女官たちもそれぞれに動き出す。

「な、ど、どうして灯りを消すの？　やめてちょうだい！　あれがどこにいったかわからなくなるじゃない！」
長公主の悲鳴が聞こえる。
しかし灯りは容赦なく一つ一つと消えていき、やがて仙峰軒は薄暗がりの中に沈んだ。
暗闇と手を取り合ってやってきたような静寂が、仙峰軒の中をしばし満たす。やがて目が慣れてきた灯灯は、甘酒と生姜で鶏肉を煮込んだ鶏酒湯を手に取って、こくりと飲んだ。柔らかい甘味が喉を通って、生姜の風味が内側から体を温めてくれる。
視線を上げると、丸く切り取られた窓から、冬蛾がひらひらと月明かりの中に飛んでいくのがちょうど見えた。その様子を灯灯と同じように目撃した女官が嬉しそうな声を上げる。
「今、冬蛾が窓から外に出ましたわ」
「本当に？」
「ああ、よかった」
「灯りをつけてちょうだい」
「早く」
「気をつけて」

消えた時と同じように、また一つ一つと灯りがついていく。仙峰軒の屋根の下がすっかり明るさを取り戻すと、妃嬪らは全員腰掛けたままで、長公主だけが女官の脚にしがみつくようにして床に座り込んでいた。
はっとした長公主が、慌てた様子で立ち上がる。俯いた彼女の顔は真っ赤であった。
「冬蛾は光を追い求める。高婕妤、冷静な判断だったわね」
皇后が静かにそう告げると、灯灯は両手を胸の前で上下に重ねて礼をした。
「恐れ多いことでございます、皇后」
「あら、まぁ。長公主、お召し物が濡れていらっしゃいますわ」
何徳妃が言った。
冬蛾に驚いて、持っていた杯をひっくり返したせいだ。
「お召し替えになったほうがよろしいわ。甘い香りに惹かれて、もっと虫が寄ってくるかもしれませんもの」
李淑妃がにこりと微笑みながら言うと、長公主はさらに顔を赤くさせてから踵を返し、どすどすと仙峰軒から出て行った。
「皇后にご挨拶もしないなんて、洸州では礼儀も教わらなかったのかしら。ねぇ、英玉」
「し、昭儀」

さして声も落とさずに同意を求めてきた蘇昭儀の口を、梅才人が慌てて塞ぐ。
「恐れながら、皇后。長公主は長幼の序というものを理解していらっしゃらないようです」
「あら、李淑妃が長公主を悪く言うなんて」
「悪く言っているわけではないわ。道理を説いているのよ、何徳妃。あなたね、まさか自分が馬鹿にされたのも気づいていないの？」
「子供の言うことじゃない。そんないちいち目くじら立てなくたって」
「子供といったって、もう駙馬（おっと）を持ってもよい年齢よ。恥を晒す前に礼儀を教えるべきだわ」
「太皇太后が考えていらっしゃるわよ」
「もう、あなたは黙って食事をしていたら？」
「ええ、もちろんそうするわ。ねぇちょっと。甘味は何が出てくるの？」
李淑妃と何徳妃の応酬が終わったその時、胡婉儀がすっと立ち上がった。
「皇后。私が長公主を宥（なだ）めてまいります」
胡婉儀がそう申し出たことに、驚いた者はその場に一人もいなかった。
胡婉儀は太皇太后の元側仕えなのだ。もちろん、長公主とも懇意にしている。全員がそれを知っている今の状況でこの場に残るのは針の筵（むしろ）に座るようなものだと、灯灯

にも容易に想像できた。
しかし、礼をしてその場を辞そうとした婉儀を、「お待ちください」と灯灯は止めた。
「今夜は、婉儀を歓迎するための宴でもあります。長公主のもとへは、私が参りましょう」
灯灯がそう告げると、皇后が少しだけ眉を寄せたのが見えた。だから灯灯は、皇后に止められる前に立ち上がると、「それでは失礼いたします」と言ってすみやかに仙峰軒を後にしたのだった。

＊＊＊

「長公主」
灯灯は、さして苦労せずに長公主を見つけることができた。仙峰軒から崇敬宮に戻るいくつかの道の中でも、夜に灯りが灯される道は限られるからだ。春児と足早に歩いていた灯灯は、まだ御花苑（ぎょかえん）を出ないうちに、前に揺れる手燭（てしょく）の灯りを見つけて追いつき、声をかけた。
長公主は一度足を止めて振り向いたが、灯灯だと気づくと無視して再び歩き出す。

「お待ちください、これを」
灯灯は長公主の前に回り込み、手に持っていた香包を差し出した。
長公主が怪訝そうに眉を寄せる。
「なに？」
「虫除けです」
そう告げても、長公主は手を伸ばそうとはしなかった。灯灯は笑って、香包の紐を緩めて見せてやる。
「桂皮の香りがするでしょう。虫はこれが嫌いなのですよ。それに、長公主が召し上がっていたのは桂花酒です。虫は桂花も嫌いますから、お召し替えは焦らなくてもよろしいでしょう」
長公主の眉間の皺がさらに深くなった。
互いの側付き女官が持っている手燭の灯りが重なって、夜露に濡れる御花苑の石畳を浮かび上がらせている。仙峰軒の声はそこには届かず、ただただ静かに夜の空気が震えていた。
「いったい、どういうつもりなの？」
「長公主こそ……なぜ、そんな態度を取られるのです？　私たちと長公主に敵対する理由はないでしょう」

灯灯はまっすぐに長公主を見つめていた視線を外して、香包の紐を再び結んだ。
「皇后は、長公主を気遣っておいでです」
「あの穢らわしい馬膺の養女を皇后として容認している時点で、あなたたちとは相容れないわ」
長公主が、吐き捨てるように言う。灯灯は顔を上げた。
「太皇太后がそうおっしゃったから、そう思われるのですか？」
「知らぬ者のいない事実よ」
「いいえ、あなたは何も事実をご存知ではありません」
一つ一つ言葉を置くようにそう告げると、かっとなった長公主が手を上げた。しかしその手は振り下ろされず、代わりに憎々しげな眼差しが灯灯の腹に注がれる。
もし――今手を出して、高婕妤が流産などすれば、長公主といえどただでは済まない。
灯灯は笑った。
「長公主は、何も事実をご存知ではない。けれど、愚かでもない。太皇太后は、それをご存知なのかしら」
手を下ろした長公主は、灯灯を睨んだ。
「お祖母様を愚弄したら、ただではおかないわ」

ああ、この子は。
と灯灯は思った。
とても、純粋だ。
眩しいくらいに真っ白ではないか。まるで生まれたばかりの雛鳥のように。
「長公主。太皇太后の庇護のもと、一生を過ごすことがお望みですか？　太皇太后が用意した者を駙馬として迎え、太皇太后が用意した道の上を、太皇太后の思う通りに歩むのがあなたの人生だと本当に思っていらっしゃるの？」
「どういう意味よ」
警戒心しかなかったその瞳が揺れる。
「率直に申し上げましょう」
灯灯は、長公主の耳に、面紗越しの口元を寄せた。
「私の後ろ盾になっていただけませんか？」
びくりと震えた長公主が一歩下がる。灯灯はもう笑みなど顔に乗せていなかったので、代わりに高良嫣らしく冷酷な眼差しで長公主を見つめた。
「私は、冷宮に入って悟ったのです。この後宮で生きていくためには、愛などという不確かなものではなく、利害で結ばれた盾が必要だと」
「どうして、私が……」

灯灯は手を肩の高さまで上げると、指を少し動かした。それを合図に、春児がすすとその場を離れていく。長公主は不安そうな顔をしていたが、やがて意を決した様子で自らの女官に「手燭を置いて、お前も下がりなさい」と命じた。
言われた通り、長公主の女官がその場に手燭を置いて、春児のいるあたりまで遠ざかる。淡い月明かりの中、たった一つの灯りを二人で共有していると、まるでこの世界に二人だけ残されたように感じた。
「私には後ろ盾が必要で、長公主には味方が必要だと思ったのです」
自分の声が、夜の冷たく刺すような空気を震わせるのがわかる。
「……私には、お祖母様がいるわ」
「太皇太后は長公主を束縛しています。味方は、あなたにああしろこうしろと命令したりしませんよ」
「そういう意味なら、佳燕がいるもの」
灯灯は、一度ゆっくり瞬きをしてから、長公主に告げた。
「胡佳燕は、太皇太后を裏切っています」
少し開いた長公主の唇が震える。絞り出した彼女の声は「ありえないわ」という言葉を紡いだ。次いで彼女は鼻を鳴らして笑うと、自分を説得するように首を振る。
「馬鹿馬鹿しい。何を言うかと思ったら……」

「啓笙殿下に毒を盛ったのは、本当に私だとお思いですか？」
『毒を盛ったのは貴妃娘娘です！』
啓笙が嘔吐と高熱の症状を出した時、そう証言したのは、小過という名の長陽宮の女官だった。小過は、高良嫣に命じられて啓笙に毒を盛ったのだと自白して、投獄された。
「……女官が、あなたに命令されたと証言したはずよ」
「しかし私にはまったく身に覚えがなく、またその女官が、何度か、胡佳燕と私的に会っていたとしたらどうです？　長公主が洸州におられる間も、胡佳燕は太皇太后の遣いとしてたびたび皇宮に来ていました。そのたび、あの女官に会っていたという証言があります」
「……」
「どうして、太皇太后の側付きであった胡佳燕が、李淑妃と啓笙殿下の寝宮である、長陽宮の女官と会う必要があったのでしょうか？」
「し、知らないわ。そもそも、その証言にどれだけの信憑性があるというの？」
「信頼もできない証言を信じて、私がこんな話を長公主に申し上げるのだと思われるのは心外ですね」
突き放すようにそう言った後、灯灯はさも今思いついたように続けた。

「まさか長公主は、啓笙殿下を害したことも、太皇太后が胡婉儀に命令したことだとお思いですか？」
すると、長公主は顔色を変えて否定した。
「ありえないわ！　お祖母様が……皇族に手を出すなんて。それだけは、絶対にありえない」
そう。それは、将桓も言っていたことだ。
太皇太后は、皇族の血筋の大切さを理解している人間だと。
一方で胡佳燕は、十六年前に太皇太后に同行して洸州へ移った太医の養女であった。彼女は当時まだ幼かった長公主の世話役となり、やがて太皇太后の側付きとなった。婉儀に封じられて後宮に入ったのもまた、太皇太后の命令のはずだ。
『ええ、そうですね。長公主』
長公主に迎合し、太皇太后に従うその言動は、ただの太皇太后の駒のように見える。
（でも、ことはそう単純ではないはずよ）
柔らかな胡婉儀の笑顔が、灯灯には気持ち悪かった。拭いきれない違和感ばかりが残るのに、その正体がわからない気持ち悪さだ。
（胡佳燕は、何を考えているの？）
啓笙を利用して、高良嫣を貴妃の座から引き摺り下ろした。それはいずれ、皇后で

ある斉微をも廃后にして、婉儀が……そして太皇太后が、太子の後見人となるための布石だったのだろうか。

だが、皇族の血筋を重要視している太皇太后が、その策略に、第三皇子啓笙を巻き込んだりするだろうか？　啓笙はまだ赤ん坊なのに。

長公主は苛立たしげに爪を噛むと、少しの間考え込んでから灯灯の横をすり抜けて行こうとした。

「佳燕に聞けばわかるわ。あなたの言っていることがでたらめかどうかね」

「待ってください」

灯灯が、その腕を掴んで止める。

「問いただして、胡佳燕が真実を語るとでも？　まさか」

長公主は灯灯の手を振り払った。

「長公主」

辛抱強くそう呼ぶと、長公主は一度息を吸って吐いてから、まっすぐ灯灯に向き直った。

「佳燕は、ずっとお祖母様と私を支えてくれたわ。だから私は、あなたの言うことよりも、佳燕の口から出た言葉を信じる」

（雛鳥ね）

灯灯は面紗の下で唇を噛んだ。

真っ白な雛鳥だ。安楽長公主がこんなにも純粋な人間だと知っていたら、接触の仕方を変えたのに。

「長公主……」

灯灯がなおも何かを言い募ろうとしたその時、背後から声が聞こえた。

「安楽、高婕妤」

その、空気を震わせる低い声に灯灯の心臓が飛び上がった。

振り向くと、少し離れた場所に、黒い斗篷を纏った男が立っている。斗篷の下には、藍色の袍を身につけているのがちらりと見えた。斜め前には手燭を持った宦官が控えていて、高貴なその人の足元を照らしていた。

男が、宦官に小さく何かを告げてこちらに歩いてくる。宦官は手燭を持ったままその場から動かなかったので、一人歩き出した男は一度夜の薄闇の中に沈み込んでから、灯灯らの足元の灯りの中に踏み込んできた。

沈香の香りがする。

白禎がいつも纏っている香りではないから、先ほどまで将桓と共にいたのかもしれない。

男の、結い上げられた髪をまとめる冠の下にある容貌は、完璧といえるほどに整っ

ていた。口元には皮肉めいた笑みが浮かんでいて、その笑み一つで後宮の女官たちが色めき立つのを灯灯は知っている。

毅王(きおう)――それがこの男、秦(しん)白禎に与えられた封号であった。

毅然(きぜん)たる王。

「毅王殿下」

灯灯が言うと、「……お兄様」と長公主が呼んだ。そこで灯灯がぱっと俯(うつむ)いたのは、長公主に何か勘付かれては困るからだ。この暗さでは、顔が赤くなっていてもわからないだろう。けれどこの、早鐘を打つ心臓の音はどうだ？

「お兄様。どうして、こちらに？」

御花苑は、後宮の一部だ。皇帝以外の男が、自由に踏み入れられる場所ではない。しかし白禎は、悪びれずに答えた。

「陛下に呼ばれてきてみたら、妹と、高婕妤の声が聞こえた」

その声が、頭上から降ってくるように感じる。それくらい距離が近いのだ。灯灯は必死で心臓を鎮めようとしていたが、「高婕妤」と呼びかけられたので目線を下にしたまま答えた。

「……はい」

「体調を崩していたと聞いていたが、すっかりお元気そうだ」

その声音は弟の妃嬪(ひひん)を気遣うのにふさわしいくらい柔らかだったが、裏に圧力を感じるのは、気のせいではないはず。

「婕妤」

灯灯は観念して顔を上げた。

灯りの中に入ろうとしたのだと言い訳はできようが、白禎は、腕を伸ばせばすぐに触れられるくらい近くに立っていた。この距離が、皇帝の妃嬪(ひひん)と皇兄の間の距離として適切なのかはわからない。

「安楽とどんな話を？　少し声が聞こえましたが……佳燕とは、胡婉儀のことですね？」

（涵景軒(はんけいけん)で大人しくしていろと言っただろう）

白禎の目がそう灯灯に詰め寄っている。

「毅王殿下には関係のないことです」

灯灯がかろうじて一歩も引くことなくそう答えると、白禎が目を細めた。

「なるほど」

先ほどとは違う意味で、心臓が鼓動を早める。夜は霜が降りるほどの寒さだというのに、汗さえ滲(にじ)みそうであった。

すると、長公主が怪訝そうな声音で言った。

「……お兄様？　高婕妤と、ずいぶん親しいのですね」
長公主の顔に戸惑いと不信感が浮かんでいる。やはり、距離が近すぎたのか。皇帝の寵妃と皇兄の醜聞など冗談ではない。灯灯は、慌てて白禎から距離を取るために後退ろうとして、石畳の隙間に踵を引っかけてしまった。
「高婕妤！」
弓形になって背後に倒れそうになった灯灯に、側にいた長公主の腕が伸びる。しかし力強く灯灯の背を支えたのは、男の手であった。
「……」
「……」
その瞬間、灯灯は目の前の芸術品に見惚れた。
白禎の、宝石のような淡い色の双眸に驚いた顔の自分が写っている。眉間には渓谷を思わせる皺ができていて、その下には、完璧な線を描く鼻梁が伸びていた。いつも厳しく閉じられている唇が今は少し開いている。
「ああ、驚いた。よかったわ」
長公主の声に我に返った灯灯は、ぐっ、と上半身を起こして白禎から一歩距離を取った。そして平静を装い、両手を重ねて空首の礼をする。
「失礼いたしました、殿下」

「まったくよ。お兄様がいなければ、お腹の子が無事でなかったかもしれないわ」
そもそも白禎が来なければ、自分が転びそうになることはなかっただろう、と灯灯は思ったが、何も言わなかった。
「安楽。婕妤は、お前の兄の嬪だ」
しかし、代わりに白禎が冷たく言った。
「敬意を払え」
すると、長公主の顔にみるみるうちに血が上っていく。
「な……だって」
灯灯は瞬きをした。
まさか白禎が、異母妹の前で自分を庇うとは思わなかったからだ。
「そもそも、今夜は皇后がお前のために宴を開いてくださったはずだろう。また、子供のような癇癪を起こして飛び出したのか？」
突き放すようなその言葉は、長公主に我を忘れさせるのに十分であった。
「ど、どうかしてるわ！　お兄様も、陛下も！　どうして、朱斉微を皇后に据えておくの？　どうしてこんな女を庇うのよ！」
長公主は怒り交じりに自らの女官を呼び寄せると、石畳に置かれた手燭を回収させて、白禎の横を通り過ぎた。怒気を孕んでその場から遠ざかっていく長公主の背をど

うしようもなく見つめて、灯灯はため息をつく。
「……わざとですね」
灯りが遠ざかってしまったので、自分の顔は見えないだろうと、灯灯は隣に立つ白禎を睨みつけた。
「林太医が、絶対安静の診断を出したはずだろう」
男がこちらを向いているのはわかったが、笑っているのか怒っているのかはわからない。
「なぜ涵景軒を出て、歩き回っている」
「退屈だからです」
灯灯のその言葉と共に、灯りが白禎の顔を照らし出した。
長公主が去ったので、春児が駆け寄ってきたのだ。
白禎は灯灯を見ていたが、笑っても怒ってもいない。灯灯の心臓が大きく跳ねたのは、いつもは氷のように冷たい男の眼差しの中に、触れれば火傷してしまいそうな熱を見つけたからだ。灯灯は自分の顔が赤くなるのに気づいて、慌てて視線を外した。
「春児、灯りを。婕妤を苑祺宮までお送りする」
白禎がそう言って手を差し出すと、春児は困惑した様子で灯灯と白禎を見比べた後、持っていた手燭をしぶしぶ白禎に渡した。その時、白禎が何か目配せでもしたのかも

しれない。春児が、距離を取ったままの宦官の元まで戻って行ってしまったので、灯灯は仕方なく、手燭を持って歩き出した白禎の少し後ろをついて歩いた。
「これでは、林太医に協力させた意味がない」
あからさまな批難が込められた言葉に、灯灯は一度黙った。
林太医は、院使と呼ばれる太医院の長だ。
平生は皇帝の診察しかしない高齢の彼を高良嬪の診察のために指名したことは、元徽帝の寵愛の証しであるともっぱらの噂だったが、そうではない。
将桓に協力して、嘘の診察を下してくれるのが彼しかいなかった、というだけの話である。
林太医は、将桓の懐刀なのだ。
将桓が幼少の頃から、病と偽って学士堂を休む手助けなどをしてくれたらしい。だから将桓が望めば、偽りの処方を書いて、偽りの診断を下してくれる。〈高良嬪。懐妊の兆候あり。気鬱のため、薬材処方。安静にする必要あり〉などとして、好奇心に満ちた見舞いを跳ね除けるのも、林太医には赤子の手をひねるようなものなのであった。
「洸州の州守は……楊丁潤は、まだ見つかっていないのですよね？」
「お前が動くことではないと言ったはずだ」

「今は私が、動くべきなんです」
こんな簡単なことが、どうして聡いはずの白禎には理解してもらえないのかわからず、灯灯は少し苛立った。
太皇太后は今、高良嫣の懐妊を疑ってはいない。
数日前、懐妊の真偽を確かめにきた胡佳燕を、灯灯が完全に出し抜いたからだ。手元に、懐妊の兆候に似た副作用を示す生薬があったのが幸いであった。
「太皇太后が嵩山寺に参詣に出たのも、皇胤が宿ったことを奉謝するためでしょう。太皇太后は、皇胤を宿した高良嫣にはもう手を出せません。だから、後宮で楊丁潤のことを探るのなら、私が適任なんです」
楊丁潤は、洸州の水害のために国庫から放出された救済米を着服し、私腹を肥やした汚職官吏だ。馬膺との繋がりからその不正が発覚し、将桓は捕縛のために人を遣わしたが、楊丁潤はすでに行方をくらました後だった。
今、将桓や白禎が血眼になって楊丁潤を探しているのは、その救済米の横領に、安楽長公主が関わっていたからだ。
ただ騙されていたにしろ、故意であったにしろ、この事実が明るみに出れば、長公主といえど無事では済まないだろう。
「太皇太后は安楽長公主を溺愛しています。だから不正の証人である楊丁潤さえ手中

に収めれば、長公主の処遇を盾に、太皇太后が朝政に関与してくるのも、廃后を画策しているのも止められるでしょう。そして、楊丁潤が自分の足で逃げ出したのなら、必ず安楽長公主に接触してきます」
不正を明るみに出され、すべてを失った男が頼るのなら、自分が弱みを握っている権力者以外にない。
そんなことは、考えるまでもないことだった。
だから灯灯は安楽長公主に近づくことにしたのだ。
長公主に接触してきた楊丁潤を、最初に手中に収めるために。
「白禎殿下」
白禎が何も答えないので、灯灯はなおも言った。
「私のことを、鉄屑になるまで使い倒すとおっしゃったでしょう」
あの言葉に喜んだ自分はどうかしていると灯灯は思った。
けれど、仕方がないではないか。
恋をした相手の隣に立つことが叶わないのなら、せめてその剣でありたいと願ったのだから。
その時、白禎が足を止めたので灯灯もぴたりと止まった。危なかった。もしぼーっとしていたら、こちらを向いた白禎にぶつかるところであった。

どうしたことかと、灯灯は顔を上げる。
しかし男は手燭を自分の背後に回していたので、その顔は影になっていて見えなかった。
なぜ顔を隠すのかと疑問を覚えると同時に、そういえば、以前もこんなことがあったと思い出す。
冷宮に、白禎が現れた夜だ。二人だけで話す機会があって、彼はなぜか灯灯の目を塞いだ。そのままいくつか言葉を交わした後で、唇に何か触れたような感触があった。
ほんの少し。ほんの少しの間だけ、もしかして触れたのは白禎の唇だったのではないかと思ったが、灯灯はすぐにその推測を打ち消した。
なぜなら、ありえないからだ。
白禎が、灯灯に口付けをする理由がない。
皇帝の兄で、親王の位を賜る皇族が、貴妃の身代わりをしていただけの小娘に口付けをする理由がないではないか。
だから灯灯は、あれは目を塞いでいた指が当たっただけなのだと解釈していた。それを今思い出して顔を赤くしてしまったのは、一瞬でも勘違いした自分が恥ずかしいからだ。
（情けない。殿下の剣であれればそれでいいと願ったじゃないの）

目の前に白禎がいなければ、自分で自分の頬を叩いていただろう。
（しっかりしなさい、孫灯灯。手に入るはずがない恋にぼけている場合ではないのよ）
――その時、低く静かな声が夜を震わせた。
「あの時、俺が他に何と言ったか、覚えているか？」
灯灯は冷たい空気に全身を撫でられたような心地になって、体をこわばらせた。一拍を置いて、また自分は白禎を怒らせてしまったのだ、と情けない気持ちに襲われる。
あの時、白禎がなんと言ったか覚えているか？
当然だ。もちろん覚えている。
彼が言ったことはすべて。
あの時……、灯灯が思いつくのは、いつもろくなことじゃないと白禎は言った。
そして折れて砕けて鉄屑になるまで使い倒すと。
（お前は死ぬまで俺のものだと。あなたの剣なのだと）
白禎は言ったのだった。
「……ああ」
白禎がため息のような声を漏らす。灯灯は、何かしらの叱責を受けるのだろうと肩をすくめたが、彼は無言のまま踵を返して歩き出した。

その後白禎は、御花苑から苑祺宮に戻る途中の飄風門の前で、侍衛の武徐鄭を見つけるまで、一言も口を聞かなかった。

「謹慎が明けたのか」

「毅王殿下」

徐鄭が白禎に礼をする。

武徐鄭は、ほんの数日の間だけ、高良嫣付きの侍衛として将桓に遣わされた男であった。灯灯が冷宮に入れられてからは冷宮の門を守る仕事についていたが、灯灯が冷宮から逃げる時に持ち場を離れたことで、謹慎処分を受けていたのだ。

謹慎が明けていたのを灯灯も知らなかったので、思わず安堵の息を漏らす。後宮の門を守っているということは、大きく降格されたわけでもないようだ。

「よかったわ」

「恐れ入ります、娘娘」

慇懃な武徐鄭は、頭を下げたまま答えた。

「高婕妤を、苑祺宮までお送りしろ」

白禎が、持っていた手燭を春児に返して命じた。

灯灯は驚いて瞬きをする。

理由もなく、白禎は苑祺宮の前まで送ってくれると思っていたのだ。

「かしこまりました」

命令に応じた徐鄭に小さく頷いた白禎は、灯灯を一瞥してから踵を返した。宦官の持つ手燭の灯りと共に遠ざかっていく白禎の背中を、灯灯は一言では説明できない気持ちと共にしばし見つめ、名残惜しさを断ち切るように首を振って飄風門を通ったのだった。

＊＊＊

御花苑に戻った白禎は、四阿で待っていた弟を見つけてそちらに歩いて行った。背筋を伸ばし、ゆっくりと茶を飲んでいる元徽帝に、白禎は礼をする。

「白禎が参りました、陛下」

元徽帝が持っていた茶杯をタン！　と強めに卓子に置いたので、中に入っていた茶が少しこぼれた。

「皇帝を待たせるとはいい度胸だな、毅王」

怒気が含まれた声音に、側に控えていた宦官らが首をすくめる。唯一動揺した様子を見せなかったのは、古参の宦官である劉太監だ。白禎と将桓を幼い頃から知っている彼だけは、すんとした顔で身動き一つしなかった。

「お許しください」

毅王は許しを請うたが、皇帝がそれに答えることはなく、代わりに黙って立ち上がる。将桓が目で合図をすると、劉太監が側にいた若い宦官から手燭を受け取って、「お前たちは下がっていなさい」と命じた。

元徽帝が夜の御花苑の中に踏み出すと、主人に先んじて歩いている劉太監の持った手燭が、皇帝の足元を照らす。白禎がそれに続き、他の宦官らは少し遅れて着いてきた。

冬の夜の御花苑は、どこか甘い香りがする。蝋梅や水仙のような冬の花が放つ芳香が、冷気の中にかすかに混じっているのだろう。昼間には気づかない香りをこうして感じるのは、視界のほとんどが薄闇の中に落ちているからだ。鈍くなった視覚の代わりに嗅覚が鋭敏になっている、と白禎は思った。

「灯灯と安楽は、仲良くなったのかい？」

少しして、元徽帝が聞いた。

その表情は緩く、怒りなどかけらも感じられない。先ほどの態度は、宦官らを萎縮させて距離を置かせるための演技だったのだと、白禎にもわかっていた。

「いいや」

もともと白禎は、将桓と共に毓秀宮に向かっていたのだ。その途中で御花苑を通り、

言い争っている様子の灯灯と安楽を見つけた。

将桓が『兄上、私は先に行って待っているよ』と言ったのは、自らの妃嬪と妹の仲裁を面倒に思ったからではない。涵景軒で大人しくしているはずの灯灯が出歩いているのを見た白禎が、眉間に深い皺を寄せたからだった。

「まったく……大人しくしていない子だね」

将桓のその声音に、どこか面白がるような響きが宿っているのは気のせいではないだろう。この生意気な弟は、兄が誰かに翻弄させられているようなのを初めて目にして、楽しんでいるのだ。

「皇胤を宿した自分は、後宮を動き回るのに適任だ、などと戯言を言っていた」

「簡単な宴を開くよう灯灯から頼まれたと斉微に聞いていたけれど、安楽に接触するためだったのかな」

逃げ出した楊丁潤が安楽に接触するはずだという灯灯の考えは的外れではない。実際その可能性を考え、白禎はすでに安楽の近くに配下の者を忍び込ませていた。だがまだ、それらしい報告はない。

「高良嬪を禁足にしろ。勝手に動かれたら迷惑だ」

「安楽はお祖母様から、我々とは距離を置くようにと言われているようだ。私が会おうと誘っても、なんだかんだと理由をつけて断られるからね。灯灯の言うように、安

立ち読みサンプル
はここまで